村報「もろつか」によせて

家代出身　本田治光

村民の皆さん明けましておめでとうございます。

さて、私も諸塚を立って早二十四年余りの歳月を迎えました。それは、ちょうど秋祭りの最中で遠く笛太鼓の鳴り響く諸塚村と周囲の田畑、山々をなつかしげに惜しみながら、昭和三十五年十一月三日、一路東京へ向け我が家を後に致しました。その時母は途中まで見送ってくれました。その母の顔には涙が光っていたことが今も忘れられません。そうした心細さと不安の大都会への一人旅、私もいやでも涙があふれることでした。就職のきっかけは、もと諸塚中学校先生（関本様）当時私の兄が教えていただいた人で、東京で工場を営んでいるという家代の中田様の紹介によるものでした。月日が立つにつれて諸塚村出身者数名の構成となりました。大きな都会に小さな諸塚村、私たちは懸命に頑張りました。しかし、時代には勝てず数年後には皆別れ〳〵になってしまったのです。私もその一人で、昭和三十九年六月自衛隊に入隊、茨城県古河市に十二年余り、その間数々の試練を乗り越へ結婚し、子供をもち五十六年一月に栃木県小山市に自宅を構え、現在栃木県宇都宮市にある自衛隊に勤務しております。自宅は東に筑波山、西に富士山、北は日光の山々に囲まれた関東平野の中央にあり、目の前を東北新幹線、東北本線が走りまだ緑の多い場所です。そうした中で子供たちはみるみる成長し、長男は高校、長女は中学三年、二男は小学五年と親の成長をはばむように大きくなりました。こうして苦しみや楽しみ、そして悲しみの果てに、勇気づけられるものがあり、毎日生活の支えとなっているもの、それは、毎月送られて来る村報「もろつか」である。毎回色々な方法により報じられる記事に、諸塚がこれ程までに変ってしまった事は、私たちの思い違いでしょうか?

寒さに震えながら学校に通ったあの道も、メジロを追い、アケビを取り歩いたあの山も、魚を取りはしゃいだあの小川も、うそのように変り果て、近代化して行く諸塚を、この村報「もろつか」によって知るものです。あの人はどうしているかなあ、あの人は何処にいるのかなあ、あの時遊んだあのチビは?、村報は私たちが忘れかけていた諸塚のあらゆる事を教えてくれます。スポーツを初め色々な競技会、牛、椎茸などの品評会も忘れられない一つです。そうした中で二～三年前、兄を通じ日向農協諸塚支店の協力により、数箱の椎茸を取り寄せ周辺の人たちに紹介したところ、味、品とも大好評を受けそれ以来今までに数百の椎茸を利用させていただきました。協力をしていただいた兄、及び諸塚支店の皆さんに感謝すると共に、今後も御協力下さいますようお願い申し上げます。

また、東京周辺には諸塚出身者が数十名います。たま〳〵ひまをみては会い、なつかしげに話す諸塚弁にいつまでも別れを惜しむことさえあります。遠い田舎を離れ人それぞれに生き方は違っても村報「もろつか」はいつまでも続いてほしいものと願っているものです。こうして私たちに送り続けてくれている関係者一同に対し厚くお礼申し上げますと共に、今年もまた一層の御協力をお願い致します。私たち諸塚出身者も諸塚の村民の皆様の御無事を願い、明日へ向って頑張りたいと思います。

出会い

㈢

火宮喜久夫

木下と私は出征、堀は留守勤務となり、陸軍病院に残ることになった。私の属した第十一中隊は軍旗中隊として、兵門出発、折り柄激しい雨を衝いて都城駅に向い、途中神柱神社に武運長久を祈念した。

勇躍征途に就く。宮崎駅頭では、産業組合講習所に入所し、勉学に励んでいた家代出身の黒木春男君に逢う。春男君が開口一番〝先の列車で正己さんに逢った〟と出征を見送ってくれた。門司港で輸送船に乗船し出帆。玄海灘を通過する頃は、かなりの揺れを身体に感ずる。その船中で木下と出会い、遙か遠く去り行く母国日本の空に向い、言いようもない寂しさと、これで日本は見納めになるのではないかという感傷にひたりながら、互に武運長久を祈り堅く手を握り合った。

釜山からは列車輸送であったが、各師団の兵員、弾薬、糧秣等の輸送が輻輳して計画通の輸送が出来なかったものと見えて、京城附近で三～四日滞留する等アクシデントがあり特に我が十一中隊は古参中隊長だった故もあってか、五師団の車輌部隊の引率責任者となったので、木下からの中隊に遅れること二日、木下の中隊は京城市内に、我が中隊は馬匹等繋留の為龍山歩兵第七八連隊補充隊の兵舎に滞留する破目となった。滞留中に輸送開始となり鴨緑口の鉄橋を渡り山海関―天将と通過、天将附近にかかると列車から戦争の痕跡の展望が出来るようになり、戦争の実感がひしひしと感ずるようになった。木下の中隊に遅れること約二日、北京の手前の豊台駅に下車、豊台では取りあえず鉄道守備隊の兵舎跡に宿営、その宿舎で「サソリ」に刺された兵隊の治療をする。この時初めて「サソリ」を見る。これからが以前木下が書いた私の行衛不惨事件が発生する。

木下の中隊は既に黄村という部落に到着し、新作戦命令を待期中であった。我が十一中隊は宿舎を引払って隊列を組み、Ⅲ大隊集結地である黄村に向って出発。その時の事である、金丸曹長（都農出身）から〝おい火宮、お前はこの自転車に乗って行け〟と言うので、これ幸とばかり、荷台に公用行李を積込み中隊の後尾を行進した。駅付近の道路は路面も良く自転車乗りには好都合であった。全員は重たい背嚢を背負い完全武装の上に歩兵銃をかついでの行進は、重苦しいものがあった。それに比較して自分は自転車である。得意顔も束の間、数知れぬ車輌部隊に行手をはばまれ、しかも何日前に降ったであろう雨のため、どろんこ道となってそれはまるで田植の時のぬかる田よりもひどい泥路であった。自転車をこぐどころの話ではない。車輪は一杯の泥土がくっついて、押せども引けども動かない。仕方がないから自転車についた泥棒ではねたり、単靴でけったりしながら一寸ずりに進むのだが、気持ちはいらだつばかり、全身泥汗まみれとなって死に物狂いの泥土との戦いである。ふと気がついてみるとなんのことはない、中隊の姿はその辺りには無いのだ。車輌部隊はしきりもなく通過する。時折りその部隊の兵隊に、我が中隊の所存を尋ねてみるが、誰一人として知っている者がいない。やがて四方に暮色が迫まり一刻一刻と深まってゆく。気持ちはあせる、夕暗の訪れは意外に早い、どうやら泥路の悪路も通り過ぎたらしい。自転車が急に軽くなったようだ、ホッと安堵の胸を撫でおろす。ところが部隊の行先が全々判らなくなっている。おまけに自転車の前照灯も駄目になっている。ただ押して進むより他に術がない、万事休すか?

大体この方向に進んだであろう道を一人で自転車を押して進むうちに既に無人になった部落にさしかかった。あちこちと飢えと人気のないのにおびえているのか、犬の遠吠が聞こえてくる。心細さと空腹をこらえながら前進すると、待ち構えたよう野犬数匹が牙をむいて襲いかかってくるではないか、下手に犬に掛かり合っていたら、その不意を衝りて何処からともなく土民が襲撃するかも知れない。自分は殺されても致し方ないとしても、秘密書類が入っている公用行李を奪われ、敵軍の手中にでも入れば今後の部隊の作戦行動に一大支障をきたすことを憂い、総ては明日の運命に任かせることにして、急ぎ今来た道を引返しつつ右側を見ると、さほど遠くない彼方にかがり火が見えた。あゝー、あれはきっと友軍の居る場所に違いない。事情を話し一宿を頼もうと火の見える方へ急いだ。

つづく

日本と総理大臣の流れ

ごとう　おさむ

八三年は角栄裁判で暮れたようなものだったが、八四年の陽の出はことのほか晴朗に明けた。一国の元総理大臣が実刑判決を受けるなど、まして王国制の日本では考えられない様な出来事であった。総理大臣と云う一国の最高の一席に着くことは、まったく容易なことではないからこそ角栄裁判の様なことが起きる素様も生じたと云えるのではなかろうか。

歴代の政治の舞台で大なり小なり似たことがあったことは確かであるが、角栄は一番悪い時に重病な食あたりになり医者にみてもらわなければならない状況になったと云えるのではないか。この様なことの起きた背景を歳も新たまった今日考えてみよう。

総理大臣になるまでは、一般に人気のなかった池田勇人が総理大臣になって十年間で国民の所得を二倍にすると公約して積極政策に乗り出した。そしてあっと云う間に高度成長経済をなし、世界中を驚嘆させた。今や世界唯一の経済国の基盤をなしたのは池田の手腕に外ならない点が大きい。然し池田ほど、また或る時々に放漫な政治を押し進めた総理大臣も少なかったが吉田総理大臣の一番々頭だけのことはある。答弁が悪口になることでは歴代総理の人後に落ちない。中小企業の倒産があってもかまわぬとか、貧乏人は麦飯を食え等の放言は常民の嫌悪をかったが、近頃の総理大臣の口からは聞くことの出来ない放言が聞かれたものだった。今に思えば、こんな人が政治家だと云いたい。要するに積極果敢な池田であった。

造り酒屋に生まれ、生来大酒呑みで、呑んでは連れをどなりつけ、夜が明ければ、昨夜のことは覚えてないぞ、そんなこと云ったかと云う豪放ぶりが、一度政治となると人が変わってしまう。この様なことが政治家池田を大きくしたのだろう。

同じ吉田の番頭の佐藤は池田と逆に非常な慎重政治家であった。悪い奴ほど良くねむると云うことがあるが、団十郎顔宣しく歴史に残る七年八ヶ月長期政権を樹立したが、政治の佐藤から、ノーベル賞の佐藤と云われてからは「花の命は短かくて…」か、散り際も良く世を去ったが、今なお存命なら陰に陽に岸や三木、福田以上に陰権の王様におさまっていたであろうと思われるが、遠い世界から角栄裁判に明け暮れている今日をなげかわしく眺めていることだろう。

今にして思えば角栄はトップへの飛び出しが早すぎた。猛進型の角栄の出番は池田と佐藤が安定した日本を造り、経済は伸び、そろそろ国民が住み良い社会環境で夢の生活を思い始めた頃、トップに立った。日中国交は誠に立派だったが、列島改造政策が良い夢の様な社会での生活を思い始めていた国民の前に強引に押し進めようとしたのが短命内閣のもととなったようである。今のような長期不景気低成長時代に角栄が出現して来たら大歓迎され、政策は大受けしたこと間違いなしと思う。要するに「角栄は出現が早すぎた。今様時期に現われるべき人物だった」そうすれば本当に名宰相とはやされ政権を長く保つことが出来たと思う。いずれにしろ中曽根総理大臣と合併して田中軍団は当分ゆるぎない国会路線をカジ取るだろう。

角栄問題が起きて八年になる。外国人は一様に云う。日本はこんなことをなぜ早期解決出来ないのか尋常には解せぬことだと頭をかしげている。当時の最高責任者の三木や稲葉引いては福田の反省が怨念合戦になっているのが一因であり、野党もまた同様である。この間明けても暮れても角栄を演説の種にしての千返繰り、そして国民の惰を買う作戦に出ているが、この騒動中に野党は伸びどころか低落の一途で、増々角栄に良い意味での油をそそいでいるようにこそある。

本当にやったことならそれは確かに良い事ではない。然し「池水に落ちて溺れる犬はこれを救い」と云う中国の諺がある。中曽根総理よ厳しくして日本一の働き総理となり地方議員の手本となることこそ八四年の責務だと申したい。日本津々浦々山のすみずみの人までこの人達の政治を見守ろうではないか。

（脱稿十一月七日）

民有林の恩人・小林天外翁

藤井　長治郎

本県における美々川以南の山林は殆んど国有林で民有林が非常に少ないが東西臼杵郡の山林殆どが民有林で国有林が非常に少ない。

須木村の如きは九一％国有林で田の畦から直ちに国有林になっていて地域住民は大変困っている。これは何故だろうか、延岡の小林天外翁こと、小林乾一郎氏の献身的な功労によるものである。

小林乾一郎氏は弘化二年、年（すゝむ）氏の長男として、岡富村宮の下に生れ、幼児より習字を寺小屋で漢字を塾で学び、長崎大阪東京に遊学して剣道、漢学英書を修学せられた、郷土においては先覚者として村会議員県会議員を歴任して郷土発展のために活躍し、一方内藤家にあっては家令として国家の殖産教育本業に尽瘁して国家及び郷土のために尽された功績は誠に偉大なものである。

乾一郎氏は明治二十五年衆議院議員に当選したが代議士としての十年間は星亨氏等と共に自由党に席をおいて活躍した。

当時の農商務省山林局は山林の乱伐を憂へて全国の山林を国有林に編入することを決議して林務官を各県に派遣した。本県にも林務官が来県して県北部から編入作業を開始した。

乾一郎氏は時の東臼杵郡長原時行氏と協議し、郡民大会を開催して国有林編入絶対反対を決議し、同時に上京して農商務省に対し国有林編入阻止運動を猛烈に展開した。

然るに、農商務省の態度は非常に強硬で本県における国有林編入作業は強制的に進められ、林務官の一行は東西臼杵郡に迫まろうとした。

こゝにおいて乾一郎氏は再び郡民大会を開いて抜刀隊を組織し、乾一郎氏自ら隊長となり、大刀を腰にさし全員を率いて美々津の対岸に陣取った。そして一歩でも林務官が郡内に足を踏み込めば用捨なく斬捨てる意気込みで全員抜刀して待ち構えた。

林務官の一行は怖れをなして東西臼杵郡内に姿を現わさず、郡内の山林は国有林とならず無事であったという。

之は一重に乾一郎氏の献身的な果断の賜と云うべきである。

東西臼杵郡民は天外翁の霊に感謝すべきである。

乾一郎氏はその晩年、大正十四年から昭和四年に至る、即ち八十才から八十五才の間において自叙伝「生涯漫録」を書いておられる。文章を省略し要点だけを書くことにする。

○要点　「人生には幸不幸な人生がある。

自分は八十才になるまで壮健で子孫も多く、皆楽しく暮らしているから幸福な人生と云うべきであろう。私の八十年の生涯ほど移り変りの激しかった時代はなかろう。実に隔世の感がする。

私が二十才までは封建時代、所謂江戸時代で武士が大小を腰にさして、いばって百姓町人を塵やあくたのようにさげすんでいた時代であった。然るに明治元年伏見の役から急に徳川幕府の威勢が衰え、文明開化の風が吹き初めて商工業が盛んになった。

私の家は代々内藤家の家臣で身分は低かった、奥州岩城平において小林右ェ門勝重が内藤藩に仕えたのが内藤家の家臣になった初めである。このお方は学問があったので重く用いられ、代官になって内藤藩が延岡に移封になると、借して延岡に移住したのである。

その後千三郎の代になると千三郎に嗣子がなかったので駒木根成吾の二男、年（すすむ）を迎えて養子とした。

之が私の父である。私の家はその時代は家禄は低かったけれど父年（すすむ）は弓術砲術の達人であったので藩主政義に引き立てられてだんだん出世して遂に、大阪藩邸の留守居役兼吟味役に昇進した。その後は最上位の役で、禄高も高く、新年の式で家を出る時は先払い一人、若党二人、カゴ草履とり一人、槍持一人、合羽かつぎ一人、はさみ箱一人と云う供ぞろいであった。父は私が三十才の時、六十一才でこの世を去った。

私は八才の時、大島先生の寺小屋で習字を学び、平井先生の学舎で漢字を勉強し、十二才の時から剣道を初めて、新刀流小野先生の道場に通った。

安政五年に家族一同大阪に引越した。私は大阪では一刀無念流奥平先生の道場に通って、剣道ばかり熱心に勉強した。なぜこの時学問をしなかったか、今でも後悔している。

文久元年には藩主の許可を得て武者修業に出た。下村国右ェ門関寛賢に連れられて、堺郡山伊賀上野藩水口藩寺を剣道の試合をして廻った。然るに大阪ではハシカが流行して、母はそのために急逝した。私は心中どんなに悲しんだことか、それは私が十八才の時であった。

その当時の京都、大阪の情勢は、徳川幕府の威勢が衰えて、尊皇討幕の思想が充満し、京洛の町は、秩序は乱れ、新撰組は横行して到る処で殺傷が行われ血なまぐさい限りであった。従って当時の青年は学問を志す者はなく、ひたすらに剣道の修練のみに熱中した。この風潮を受けて私も京都では、与力大野先生の道場に通って、専ら剣道の修練に熱中した。

文久三年、延岡に帰った。ある日、私は郡奉行薬谷英孝に進れられて、北川村を巡回した。その時私の才が奉行の目に認められて、長崎出張のお供をすることになった。之が機縁になり私は藩の派遣留学生となって、長崎で英書、漢字を勉強することとなった。私は変応年間まで北島塾で一生懸命勉強した。次いで明治三年東京に行き、尺八塾に通うた。更らに大学南校の試験を受けるとパスした。大学南校に入学すると間もなく延岡に帰るよう懇請を受けた。延岡では海老原時行氏等が延岡社学（学校）を創立して英語の先生に懇請されたのである。いたしかたなく延岡に帰り英書の教師となったのが明治六年であった。この年妻を迎えた。明治八年には父と死別し、この時ほど、悲しかったことはない。

私は明治十年の日南の役で多方面に渉って活躍し、明治十五年東臼杵郡の茶業に関係した。一方政治方面では明治十九年から明治二五年まで県会議員、明治二五年から明治三五年まで衆議院議員、岡富村会議員には三〇年間議席をおいた。中央政界においては星亨氏等と共に自由党を母体として大いに活躍した。一方内藤家にあっては明治二三年から家令として、殖産教育事業に精励した。之が私の八〇年間の足跡の大要である。

以上は小林天外翁が八〇才の時に書かれた自叙伝(生涯漫録)の要点である。

乾一郎氏は書及び水墨画をよくした。天外はその雅号である。県会議員、衆議院議員活躍せられた。鈴木憲太郎氏の二男である。

『座頭さん』（1）

山里の春のレクレ
500年祭

椿　運

露にぬれ静けき森に吉之宮
　悲哀に眠る琵琶の旅僧

〃東は朝日直射すところ、西は夕日の日照る峰。南と北は山脈つづき、高峰山河霊境の、ここぞ名におう吉之宮〃

吉之宮は諸塚村と北郷村の境中尾峠に建っている。神社の裏からは絶景が広がり、はるかに遠く物語りの延岡市が眺められる。車座になって酒をくみ交し弁当を開いて楽しむ、古くから行われる春の野中の祭り風景であります。

供養塔の表面に「明音院見行盲等」とあり、その側に「享保十九申寅年十月二十日二五〇年二相当り」と書いてある。加来睦三郎睦えが弘化二年旧三月二十七日ここを通り「高千穂採薬記」と云う日記に吉之宮の由来が書かれてある。琵琶法師が殺されて二五〇年忌に建てられたので、今から五〇〇年前文明十六年足利時代の事件である。法師を殺し金を奪った悪者は県の里（延岡）に帰り商売繁昌して金持になり子孫も栄えたが、盲の子供が次々に生まれて来た。

天罰の恐しさに、延岡から吉之宮の峠が見える小野の峠に拝所を建てて常夜灯を明し日参り、二十八日に月参りを続け、年に一度の祭日には吉之宮に参拝し袱紗包を奉じて拝んで帰った。

記録には「法師は吉野の宮の検校で南朝の忠臣菊池を尋ねて日向に下った」とある。

〃大凡五〇〇年の其の昔、風は昔の響を伝え、座頭伝記の語りぐさ、南朝の忠臣菊池を尋ね、世にもまれなる旅の僧。其の名検校手引孫八、県の里を立ちでて二日、流れも消き清川に、一夜を宿し安らぎぬ。明くれば三月二十八日、中尾峰にさしかかる。〃

大金を持っていることを知った悪者は、延岡から法師等の後をつけて、何回か山の中で殺そうとするが、法師の身体に御光が射し、前を白狐がさえぎり、どうしても斬る事が出来ずに、とうとう中尾峠まで来たのであります。

〃折しも春のおとずれに、吹き来る哀な春の風。松のこづえを吹きならし、にわかにしぐる、春の雨。かける山間にきこゆるは、里の鶏木挽唄。峰の雨空影暗く、先を案ずる吾心。やがて消ゆべき我が身とは、露の命を如何にせん。知らで木陰に雨宿り、つかれをいやす僧とつれ。しばし過ぐれば西空は、からりと晴れて茜さす。折しも悪者木陰より、太刀振りかざし斬りかかる。鋭き刃先に盲僧は、見るも無ざんに殺される。〃

これを見た手引の孫八は、西北方の窪の平の方に逃げ出した。後を追いかけた福田某は後難を恐れて孫八を殺した。窪の平には孫八の墓があり、今は寂しく祭のころ、春忘れの花が白く咲き名残りを止めている。

〃血刀拭い金をばうばい、夕霧の中に消えて行く。野中に果てし悲運の二人。主従の霊は執念に、変りて法の琵琶の音は、七日七夜を鳴り渡る、血の雨三日降ったと云う。衣の下のキリギリス、啼くや夜空の松の陰、哀れなりはつ姿なり、げにや人の一念こそは、二人の霊は恩しゅうと、報復の念にもえ盛り、かたきの行末にたたりをば、こずえ間に〱星の影、不思議や追手の遺族の者に、目をわずらいて見えざる者が、幾世代々跡をもたゝず、後世までもひたすら続く。追手みちびき加勢した、子孫に見にくきソッ歯が生まれ代々続き世をはかなみて、子孫は絶えて跡もなし〃

吉之宮神社

七ツ山公民館改修 調理実習室完成

老旧化していた七ツ山公民館が、床、かべ、窓等が改修され、その横に、婦人会から希望の多かった調理実習室が完成しました。十二月十五日には、地元と関係者が出席して竣工式が行われました。

○七ツ山地区集会施設改修工事
・暖地営農村づくり事業
・事業費
工事費　七、五八三、〇〇〇円
設監料　四一七、〇〇〇円
計　八、〇〇〇、〇〇〇円

○七ツ山公民館調理実習室設置
・水力発電施設周辺地域交付金事業
・構造
木造平屋建一棟　七〇、八〇㎡
・工事費
八、五四四、〇〇〇円

改修された七ッ山公民館

新築の調理実習室

第661回共販速報

昭和58年12月5日

師走の声を聞いたとたん人荷材も一段と多くなり一層のあわただしさを見せ始めた。市況も最近まで強かった小径木に息切れが見えたほか概して強保合で推移した。来る15日は今年共販の納市価格の値動きが気になるところ。

以下、今回の市況

樹種	長さ	径級	安値	中値	高値
スギ	2m	9～13	5,000	6,500	8,000
		14上	11,500	12,000	13,500
	3	3～10	13,000	13,500	14,000
		11～13	15,000	17,200	18,000
		14～16	20,500	23,000	24,000
		18～28	18,000	22,200	23,900
		30上	25,000	25,500	75,000
	4	6～10	13,000	15,600	17,800
		11～14	15,000	21,600	22,400
		16～28	19,300	24,800	26,800
		24元玉	24,800	30,000	45,100
	6	14～16	――	27,000	――
		30上	31,000	40,000	43,000
ヒノキ	3	14～16	33,000	34,000	35,000
		18上	28,500	33,800	45,000
	4	14～16	――	37,300	――
		18上	23,500	40,000	59,800
	6	14～16	――	68,000	――
マツ	4.2	16～28	17,800	20,100	23,800
		30上	17,800	29,800	43,700
	3～6	18～22	17,000	23,800	29,100
		24上	22,900	25,000	48,800
ツガ	4	18～28	15,000	15,500	16,000
		30上	11,000	22,200	26,700
カシ	4	18～28	――	38,900	――
		30上	26,000	36,000	57,100
サクラ	4	18～28	15,000	16,500	17,500
		30上	――	――	――
ザツ	4	18～28	15,500	16,500	43,000
		30上	23,200	30,000	41,600

本表の標準樹令は特殊材を除き杉二五年桧三〇年松三〇年。

村青協 第三七回村青年駅伝大会結果

さる十二月四日、恒例の村青年駅伝大会が開催されました。青協の年間行事の中でも、最も伝統ある行事ということで、駅伝コースとなった国道三二七号線では、たくさんの村民の方々の応援がありました。

結果は終始安定した走りをみせた七ツ山チームが二連勝を達成しました。二位には、若手の奮起により小原井チームがはいり合わせて躍進賞も獲得しました。三位、四位には、伝統のある荒谷、南川チームがやや後退してはいりました。六位には、前半のがんばりと後半のまきかえしで塚原チームがはいり健闘しました。

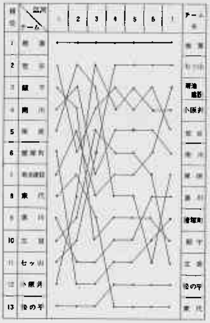
近年各チームの実力が接近してきましたが、オープン参加の椎葉青協、菊池建設が一位、三位にはいる結果となり本村チームの今後の健闘に期待致します。

なにはともあれ、一生懸命がんばった選手のみなさん、おつかれさまでした。

区間賞

第1区	平田成美	3分39秒	（荒谷）	（1.0km）
第2区	中嶋利信	10分35秒	（小原井）	（3.2km）
第3区	岡田常男	12分29秒	（小原井）	（3.9km）
第4区	甲斐　太	17分3秒	（七ツ山）	（5.0km）
第5区	甲斐隼人	9分46秒	（七ツ山）	（2.9km）
第6区	日与川和志	10分21秒	（荒谷）	（2.9km）
第7区	甲斐秀幸	16分59秒	（塚原）	（5.0km）

昭和58年度　諸塚村青年駅伝大会成績表



四区で五位からトップにたち、五区にタスキを渡す七ツ山チーム

祝御成人

成人式　1月3日
午前9時開式
中央公民館

誕生 おめでとう（届出順）

出生児	届出人	続柄	誕生日	住所
良樹	小川光成	長男	十一月十九日	塚原
百代	西村秋光	長女	十一月二十四日	小原井
有代	西村秋光	二女	十一月二十四日	小原井

おくやみ 御冥福を祈る

死亡者	年令	届出人	続柄	死亡日	住所
万一	八五	甲斐熊男	父	十一月二十五日	家代
清太郎	九〇	甲斐敏治	祖父	十一月三十日	川の口
スミノ	五七	甲斐寅夫	妻	十二月二日	荒谷
ツルエ	八一	藤本　温	祖母	十二月十六日	黒葉原

昭和59年消防始式

日　時：1月8日
午前 8時開式
場　所：村民運動場
迅速、冷静、確実に！

善意をありがとう

次の方々から、ご寄附をいただきました。厚くお礼を申しあげます。

ご寄附いただきましたお金はご意志に添うよう活用させていただきます。

香典返し

家代　甲斐熊男様（亡父万一様）
川の口　甲斐睦夫様（亡父清太郎様）
荒谷　甲斐寅夫様（亡妻スミ様）

謹んで故人のご冥福をお祈り申しあげます。

諸塚村社会福祉協議会

甲斐ヤマ先生ご逝去

長年にわたり本村の医業、村政に尽力され数々の功績を残されました甲斐ヤマ先生が昨年十二月八日心不全のため宮崎市の自宅にて急逝されました。

謹んで故人のご冥福をお祈り申し上げ、皆様に御報告致します。

葬儀につきましては、宮崎市弘益社において、多数の親戚知友隣人の御参列を賜り、無事終らせて頂きましたが、生前村民の皆様には格別の御懸情と御支誼を頂戴いたしましたことを、心から深く感謝申し上げます。

甲斐村長様、黒木議長様をはじめ多くの方々からの御弔詞御芳情に改めて厚くお礼を申し上げる次第でございます。

本当に有難うございました。

宮崎市吉村町西田甲
甲斐　佐
マリ子

ごあいさつ

母　ヤマ儀旧冬十二月八日心不全により自宅にて急逝いたしました。

甲斐ヤマ先生の死を悼む

藤本喜平

一、明治の未期生れきて
われに鞭打ちまっしぐら
医道めざして女子医専
了へて更には技を磨く

二、この世諸行無常とは
人の命の果かなきよ
呼べど声なし天暗く
柩の前に額きて

三、若きあの日の面影は
嗚咽のひびきいぢらしさ
その名ヤマさん今は亡し

紅一点の村議歴
婦人の地位を普く拓く
健気な精神実を結ぶ
遺徳は永久に伝えなむ

四、医は仁術を謳われる
山又山の隅々を
駄馬に跨り更に徒歩
患者の鼓動を丹念に

五、過疎の兆しの繁き中
生涯捧げし医の道に
盡した証数々と
我道しるべと無にはせじ
嗚呼先生よ、さようなら

診て憩ろに運ぶ処置

護王様のひとりごと

氏子

儂はのお、もとは阿蘇に居たんじゃよ。広大な阿蘇の台地を気の向くままに駆け巡っていたんじゃよ。春ともなれば黴の様な灰褐色の台地には、一斉に新緑が蘇えって来る。そして夏に向って緑は増々濃さを増し、草丈もぐんぐん延びてきおる。この頃になると里人達が赤牛をひいて放牧にやって来るんじゃよ。儂はこの牛達が怪我をしわせんか、病気になりゃせんか、中にはお産をする母牛もおるので、子牛は無事出産出来る様見廻ったものじゃよ。こうした事から里人達は今も儂を牛馬の神として崇めているんじゃよ。

いや、これはどうも話が横道にそれてしもうたわい。そうじゃ台地が青一色に包まれた中に野バラや卯の花が咲き、やがてそこかしこに真紅の手毬の様にツツジが咲いて彩を添え、なかなかの風情じゃったぞ。そして台地に涼風が吹き抜ける頃になると、ススキが一斉に穂を出しハギが、クズが、オミナエシがそして野ギクが咲いてこれまた捨て難い趣であった。

この平穏な台地も時として一変する事がある。それは百雷の一時に落つるが如き大轟音と共に噴煙は天を覆い、数十丈の火柱と人間の頭程もあるものから大小さまざまな噴石を飛ばす大爆発じゃ。儂はこうした天地自然の偉大な力に驚嘆したものじゃった。

こうした四季折々の変化に富んだ阿蘇での日々に決して飽きた訳ではなかったのじゃが、以前から一度旅をしたいと思うていたんじゃよ。それは東の方に一本の杉の古木がある。根元はウトになっていて子供達が十人位入れる程のものじゃった。太枝が多くて決して立派な杉とは云えなかったが、儂はこの杉が気にいってのお。実はこの杉の近くで暫らく過す気になっていたんじゃよ。里人はこの杉をオトー杉と呼んでおった。

そうじゃなあ、もう胡麻の籾が硬くなっとったから十月も中ば頃だったじゃろうか、台地は朝夕ヒンヤリと冷気に包まれ、風は西から東に向って可成り吹いていたんじゃ。「よし旅立とう」儂は台地の岩場に東に向って立ち目標を定めて杖で岩をつきヒョイと飛び立った。途中順風に乗って目的のオトー杉の上あたりまで来た時じゃった。突然東から一陣の突風が吹き返して来た。その風で儂は木の葉の様に二転三転させられた。いやはやその風の激しいこと、多分風速四〇メートル位はあったじゃろう。お陰で衣はズタズタに破れて四散してしもうたわい。

しかしなあ、幸いに腰衣だけは無事ですぞ。これでどうにか男神としての対面は保つ事が出来たんじゃよ。やっとの事で体勢をたて直して下を見ると下は小さな段々畑で胡麻が作ってあった。免に角その段々畑に降りる事に決めたがこの風の為今度は着地に失配してしもうて、不覚にも右目を胡麻の籾で突いてしもうたんじゃよ。これには儂も参ったぞ。まだ塚原に甲斐医院がなかった頃の事じゃでのお。何しろ痛みが増して頭痛はするし、傷ついた目を押えてあたりを見廻すと、幸いすぐ近くにこんこんと湧き出る清水があったのじゃ。儂はそれをすくうて傷をいやしたんじゃ。そしたらなんとこの水がとても良う効いてのお。あれ程激しい痛みも嘘の様にとれたんじゃよ。そして毎日この水で傷をいやしていたら日をおうて良うなったんじゃ。後で知った事じゃが、この水は村人達の大事な使い水じゃった。

村人達は儂の為に社を建ててとても大事にしてくれたんじゃ。儂は貧しいが心の豊かな村人達が好きになったんじゃ。儂は天地の続く限りここに在って、村人達の居る限り氏神として見守ってゆく考えじゃよ。村人も儂の目の事を気づこうて、以来釜の前では胡麻を作らない事にしてくれとるんじゃ。

久し振りに帰ったので疲れてしもうたわい。それでは儂は暫らく眠る事にするぞ。お・そうじゃ眠る前にもうひとつ言うとかにゃならん事があったぞ。あれはいかんぞ、乗馬のまま儂の庭に入るのは。無礼な奴じゃで、馬は儂に力が入るのか鞍を[illegible]ブウたれながら登って来おるわい。儂が落馬させる様に云いおるが儂は落馬させたりはせんぞ。お・かた其の者が神の庭に乗り入れた無礼を恥じて手綱さばきを誤ったか、或は庭の隅にある池のカエル共に馬が驚いての事じゃろう。

そうじゃ儂の体の赤いのが気掛りな様じゃが、阿蘇に居た時の日焼けじゃよ。阿蘇には今も時々行っておるぞ。

さて今度はゆっくり眠れそうじゃわい。

十一月詠草（兼題・便り）

諸塚短歌会

岩倉つや

この夏は便り来ぬまま息の住める北陸すでに冬に入りたり

川一つ隔ててはるか真向ひのはざまに透けるひと筋の滝

軒下の鉢に植ゑたる鳳仙花秋の陽ざしに吹き続けをり

小川しげの

清やかに秋の一句に托されし友の祝の葉書は重し

金屏風背にしてゆらぐ高島田荒き世の風も心して吹け

静もれる武蔵野の森秋深くいま降り立てり皇居前広場

とつおいつ思案に過ぎし幾春秋章重くして涙こぼるる

黒木圭子

就職の内定せりとふ息の便り読みて見上ぐる秋空深し

定まりて澄む秋空の夕茜ひとときは冴ゆる檣影木立ち

黄の菊の咲き初めにけり季めぐり盲腸手術二十年経し

中本幸子

古里の香ちあふれるいが栗を京に送りぬ宅急便に添へて

球泉洞くぐりたどればひんやりと水滴の音ひびき少なし

餅肥城の池に泳げる錦鯉秋の落葉に戯れてをり

橋口録司

便り来ぬは元気なしるしと思へども郵便受をたしかめてをり

ほどきゐる郵便小包にほひたち島の友よりさくらぼし着く

荷造りし郵便小包椎茸のかぐはしかれと切手貼りをり

生かされてただ有難き日と思ふ朝の宮に拍手をうつ

◎一月兼題「宮」と致します。皆さまの詠草は毎月十日までにお届け願います。

塚原　橋口録司あて

賀正

1984年元日　（順不同）

諸塚村議会
議長　黒木文夫
副議長　広川林
議員一同

諸塚村役場
村長　甲斐重勝
助役　加口昭馬
収入役　佐藤彰
職員一同

諸塚村立病院
院長　金雄奎
医師　日高健太郎
歯科部門　大原忠徳
職員一同

諸塚村教育委員会
教育長　松永公太郎
教育委員長　尾形森衛
教育委員
社会教育委員
職員一同

諸塚村選挙管理委員会
委員長　加口昭馬
委員一同

諸塚村民生委員会
総務　若本幸重
委員一同

諸塚村農業委員会
会長　甲斐重勝
委員一同

諸塚村自治公民館連絡協議会
会長　黒木新
外公民館長一同

東臼杵農林振興局諸塚駐在所
主任林業改良指導員　横山守正
野田孝
増永保彦
小田久人
下沖誠

日向土木事務所諸塚駐在
主任　黒木秀信
岩切勇男
菊池義男
川越克彦
前田博
甲斐祥一

日向警察署諸塚駐在所
巡査部長　日高義信
細山田国男

日向農業協同組合
諸塚支店長　尾形正夫
他役職員一同

諸塚村森林組合
組合長　中本英雄
他役職員一同

日向地区農業共済組合
諸塚支所
役職員一同

諸塚漁業協同組合
組合長　尾形森衛
他役員一同

諸塚村商工会
会長　原田一郎
他役職員一同

村立諸塚中学校　校長　亀元義男
村立荒谷小学校　校長　桑野敏郎
村立諸塚小学校　校長　牧野初夫
村立立岩小学校　校長　渡辺義人
村立七ツ山小学校　校長　西山保市
他学校職員一同

諸塚村PTA連絡協議会
会長　甲斐正人
他役員一同

九州電力株式会社
塚原発電所長　平井隆
塚原保線所長　山下美治
塚原保修所長　宮田久男

諸塚村消防団
団長　綅川安幸
副団長　甲斐忠久
〃　黒木和幸

諸塚郵便局長　橋口録司
他職員一同

七ツ山郵便局長　三浦真志
他職員一同

村婦人連絡協議会
会長　田丸マサ子
他役員一同

村青年連絡協議会
会長　甲斐幸雄
多役員一同

諸塚村寿会
連合会長　黒岩計佐一
他役員一同

軍人恩給連盟諸塚支部
支部長　西田進
他会員一同

諸塚村遺族協助会
会長　綅川鹿一
他役員一同

村身体障害者福祉協議会
会長　綅川鹿一

日向地区交通安全協会　諸塚支部
支部長　加口昭馬
副支部長　岩本康夫
〃　小川希迪

旧軍人軍属恩給欠格者連盟
諸塚支部長　綅川正美